

# 幼少期の「擬似的ふるさと」体験が地域文化の継承に及ぼす影響

牧山地域活性化プロジェクト 2022

坂本知穂, 徳留宏紀, 波多野雅俊, LIUMENGJUN, DUMENGYUAN

少子高齢化や地域の過疎化によって地域文化の継承が各地で難しくなっている。これを解消するため、定住人口を増加させることを目的とした地域活性化は様々な地域で行われているが、人口回復や人口減少率の低下につながる例は少ない。そこで、同様の課題がある岡山市街近郊の牧山地域を調査地として、地域住民、地域外住民に対して、アンケート、聞き取り調査を行い、移住ではなく、「牧山地域」を自分の故郷のように愛着を持って、離れていても多様な形で関わりたいと思う（「擬似的ふるさと」と感じる）人を増やすことで地域文化が継承される可能性を見出した。アンケートの結果から、過疎地域への興味は、幼少期の農業体験や地域の人との交流が必要であることも分かった。そこで、市内中心部の子ども達を対象に農業体験や「子ども青空市・牧山秋まつり」といった地域交流を実施することで、「擬似的ふるさと」と感じるための機会を設けた。その結果、参加した子ども達が農業体験や牧山地域に愛着が生まれたことが分かった。

Keywords : 地域活性化, 関係人仁平(2020). 世界一やさしい「やりたいこと」の見つけ方: 人生のモヤモヤから解放される自己理解メソッド. KAD 口, 持続可能な町づくり

## 1. 研究の背景と目的

地方では人口減少, 少子高齢化が進み, 労働力不足や地域経済の衰退が問題となっている。地域の維持を図るため, 国や地方公共団体では様々な政策や支援が行われている。その一つとして, 都市地域から条件不利地域に移住した者が地域協力活動を行いながら, その地域への定住・定着を図る「地域おこし協力隊」がある。任期は1年以上, 3年未満であるが, 総務省の調査<sup>1)</sup>によると令和3年3月末時点で約65%が任期終了後同じ地域に定住している。このように, 過疎地域の「持続可能な町づくり」を実現するには, 移住者を増やすことが重要であると考えられている。筒井一伸ほか(2015)は, 「都市との積極的な「交流」は移住者の受け入れをスムーズに行っている農山村に共通してみられ, 逆に「交流」を仕かけない限り移住者を含むヨソモノをどう受け入れるのか, 農山村にその受け入れのノウハウは蓄積されていかない<sup>2)</sup>」という課題も指摘する。

本研究では, 同様の課題がある牧山地域の現状から移住する可能性のある人は誰なのか探り, 「持続可能な町づくり」を実現する方法について探っていく。

## 2. 牧山地域の地域概況

牧山地域は, 岡山市街から近く中山間地域との境界に位置し, 大都市近郊の過疎地域と言える。地域資源としては, 昭和30年頃から果樹(ブドウ)栽培が進んでいたが, 高齢化, 担い手不足のために栽培面積が漸減している。

また, 牧山クラインガルテンと呼ばれる大規模な

市民農園がある。平成8年に都市住民と地域住民の交流の場と活性化を目的として岡山市が設置, 平成26年にNPO法人牧景園が受託した。NPO法人牧景園は牧山地域住民で組織されている。牧山クラインガルテンではかねてから, 「岡山市区づくり推進事業」といった事業を活用しながら, 「牧山&クラインガルテン収穫祭」を開催し, 農産物の販売や様々なイベントが行われることで牧山地域外から多くの人が訪れ, 地域内外の交流の場となっている。

また, 岡山市の定住・移住を図る取組である「岡山市地域おこし協力隊<sup>3)</sup>」として, 2人の隊員が派遣されたが, 定住に結びついていない。

## 3. 方法

### 3-1 牧山地域の実態調査

牧山地域で聞き取り調査を行う。NPO法人牧景園の方に聞き取りを行うことで, 地域外の人を受け入れる側の実情を明らかにした。

### 3-2 牧山地域外に住む人を対象とした調査

まず, 現在牧山クラインガルテンで貸農園を利用する方への聞き取り調査及び, アンケート調査を実施した。貸農園利用者同士で結成した友の会主催のそばの豆まき会に参加し, 聞き取りを行った。

また, 岡山市街に住み, 令和4年4月から牧山地域で認定新規就農者としてブドウ栽培を始めた方にも聞き取りを行った。

地域農業に関わる動機を探るため, 貸農園の利用者と貸農園を利用していない市街に住む人に過去の農業体験の有無を調査した。どちらも1月中旬から

1 月末に実施し、岡山駅前と岡山大学近くのマンションで貸農園を利用していない人を対象に行った。

### 3-3 交流プロジェクトの実施

地域内外の人が交流することによる効果をアンケートやインタビューをもとに明らかにする。そのために、「子ども青空市」と「牧山秋まつり」の2つのイベントを実施した。10月初旬に実施し、参加した約60人にアンケート調査及びインタビューを行った。子ども達へ実施したアンケート内容は、「イベントに参加しようと思った理由」、「参加して感じたこと」を中心に構成し、その他参加者のアンケートは、「牧山への興味・関心の変化」「移住についての考え」について5段階評価で実施した。

「青空市」は、牧山クラインガルテンで地元農家の方々が収穫した野菜を毎週土曜日、日曜日の朝に販売している。今回、「子ども青空市」では、NPO法人牧景園、地元農家の協力のもと、岡山市街の学童に通う小学4年生から6年生の14名の子どもたちが牧山地域の特産品であるブドウの収穫体験を行い、梱包したものや地元の野菜を子どもたち自身の手で販売する体験を実施した。「牧山秋まつり」では、地域住民と地域外の大学生や学童の子どもたちが交流することを目的とする。参加した学童の子どもたちには2ヶ月後に再度アンケート調査を行った。質問項目は、「イベントでの思い出」「今後の地域交流に対する意欲」「どんなイベントに参加したいか」を中心として、子どもたちの変容を考察する。

## 4. 調査結果

### 4-1 牧山地域の実態調査

NPO法人牧景園の方は、「豪雨災害時貸農園利用者は38%に落ち込んだが、現在60%まで回復している。高齢のため農園内の環境整備が追いつかず、今の利用者数で手一杯だ。だが利用者の方は高齢の方ばかりで年齢層が偏っているのです、若い人にも知ってもらい、関わってほしいと思っている。そのため、ホームページなどを使った広報活動もしたいが、高齢なこともあり十分な対応ができていない。」と話す。また、地域の方々が交流する機会である秋祭りは、少子化の影響や感染症の影響を受けて、ここ数年は祭りの規模縮小化が進んでいる。

### 4-2 牧山地域外に住む人を対象とした調査

貸農園利用者は、「小さい頃は“土で遊ぶ”ことが当たり前だったが、就職して触れる機会がなくなった。定年後また土に触れられる場所としてガルテンを利用するようになった。」「仕事を辞めて、ゆっくりと貸農園をしたいと思い、いい場所を探していたところ、インターネットで牧山が見つかった。他の利用者さんとの関係もできて、みなさんいい人

で嬉しいです。」と話す。

また、令和4年4月から牧山地域でブドウ栽培をしている方は、「シャインマスカットとピオーネを栽培している知人の住む牧山地域が、高齢化・担い手不足の問題を抱えていることを知り、市街からも通いやすく、地域農業に尽力したいと考え、就農を決めた。高齢で後継ぎがない地域の方からも農地を任せられるようになった。農業は地域の人との協力的なことは行っていくことができないので、このような人と人とのつながりを大切にしていきたい。」と話す。

貸農園を利用していない市街に住む人への調査では、幼少期の体験が地域農業へ関わる動機につながることが分かった。(図1)

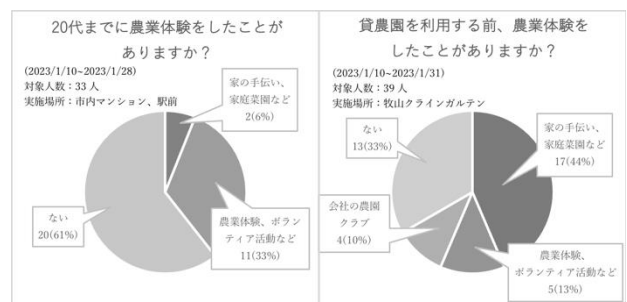


図1 農業の有無に関する調査結果

### 4-3 交流プロジェクトの実施

#### 4-3-1 子ども青空市

牧山地域のブドウ農家の協力により、普段土に触れる機会が少ない岡山市内の学童に通う子ども達は、地域の特産品に触れ、販売活動を通して地域住民や貸農園の利用者との交流をすることができた。体験を通して子どもたちは、「初めてブドウの収穫を行ったことが嬉しかった」「野菜や果物を売った経験は貴重で、牧山の方々に感謝している」と話す(図2)。



図2 子ども青空市の様子

#### 4-3-2 牧山秋まつり

地域住民と牧山以外の地域に住む大学生や子ども達とのつながりを作るため、学童の子ども達も看板

作りを行うことによって地域に貢献しているという意識や地域とのつながりを感じることができるよう工夫を行った。(図3)



図3 牧山秋まつりの様子

参加した地域住民は、「牧山地域で最近大きなイベントもなく楽しそうだから参加した」と話す。地域外から参加した人は、約70%の人が「牧山地域についてもっと知りたいと思うようになった」「牧山地域の人たちともっと交流したいと思うようになった」と回答し、90%以上の人が「自分の暮らす地域の人たちともっと交流したいと思うようになった」と回答し、地域内外の交流を深めることができたことが読み取れる。(図4)

イベント終了後、学童のアンケートでは、「みんなと参加したかったから」「ものを売る活動に興味があったから」参加したという2つの理由は半数を超えていて、参加するまでは地域への興味関心が低いことが分かった。イベント直後に行ったアンケートから、ぶどうを売る活動から、販売活動に対する意欲が高まったことが分かった。



図4 地域住民と大学生、子供の交流

イベントを終えて2ヶ月後に実施したアンケート調査では、9割以上の子供たちが今後も地域の人と関わるイベントに参加したいと回答した。「もっと人とかかわりを増やしたい」という声もあった。そして、「大人になったときに、牧山に行って、農業を行いたいかな?」という質問に対して「はい」と回答した人は半数であった。

## 5. 考察

牧山地域の受け入れ側・牧山クライנגルテン貸農園利用者・子どもを対象としたアンケート及び聞き取り調査の結果から、移住を目的とした取組はハードルが高いことが分かった。また、岡山市の取組が定住につながっていないことから、「持続可能な町づくり」には、定住・移住以外の地域への関わり方を見出していかなければならないと分かった。

さらに、貸農園利用者と岡山市街の貸農園を利用していない人を比較すると、幼少期の農業体験が大人になった時の農業への関心に結びつくと考えられる。「子ども青空市・秋まつり」では、地域の人との交流だけではなく、9割の子どもたちが、販売活動への意欲が高まったことから、地域資源を販売するという活動を取り入れることで、子ども達はその地域に貢献したという成功体験につなげることができた。

以上のことから、地域文化の継承のあり方として、「擬似的ふるさと」の考え方を提唱する。これは、都市部の子ども達が、過疎地域で体験した農業体験や地域の人との交流によって芽生えた地域への愛着や地域文化・産業への関心が、その地域経済や地域文化を支える動機となり、サポーターとなる人を増やすことができるという考え方である。このような考え方は、平成30年に総務省がまとめた「これからの移住・交流施策のあり方に関する報告書<sup>4)</sup>」で、「関係人口」として提示されている。これからの地域づくりの担い手として、「移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々」である「関係人口」の重要性を指摘する。都市部の子ども達の農業体験や地域の人との交流によって、その地域を「擬似的ふるさと」と感じるようになり、将来その地域に住んでいなくても多様な形で関わる(関係人口)ようになれば、「持続可能な町づくり」を実現できると考える。

## 6. 今後の展望と課題

このような取組は都市と過疎地が隣接する中規模な都市近郊で成り立ちやすいので、岡山市で都市部の子どもと地域を結びつけるような取組がなされることが望ましい。

実施したイベントでの子どもの体験が大人になった時、本当に牧山地域に関わるようになるかどうかは、継続的に調査をする必要があり、今後の課題とする。

## 7. 謝辞

本研究を進めるにあたりご協力していただきました、NPO 法人牧景園副理事長本郷繁之様、ぶどうファーム吉田の代表吉田隆行様、収穫体験をさせていただきました八代雅子様、ご指導賜りました松多信尚先生をはじめとして、イベントに参加して下さった岡山大学大学院教育学研究科の先生方に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 総務省 | 地域力の創造・地方の再生 | 地域おこし協力隊 (soumu.go.jp) (閲覧日 2023 年 1 月 20 日)
- 2) 筒井一伸・佐久間康富・嵩 和雄「都市から農山村への移住と地域再生—移住者の起業・継業の視点から—」(「農村計画学会誌」34 巻 1 号, 2015 年)
- 3) 岡山市地域おこし協力隊について | 岡山市 (city.okayama.jp) (閲覧日 2023 年 1 月 20 日)
- 4) これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書 Microsoft Word - 最終報告書 v13.docx (soumu.go.jp) (閲覧日 2023 年 1 月 20 日)